





新版横溝正史全集
18
探偵小説昔話

講談社



新版 横溝正史全集 18

探偵小説昔話

昭和五十年七月三十日 第一刷発行

著者 横溝 正史

発行者 野間 省一

発行所 株式会社 講談社 (企)

東京都文京区音羽二―十二―二十一

郵便番号 一一二一

電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

半七写真印刷工業株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本はお取りかえ致します。

©横溝正史 1975

Printed in Japan

目次

探偵小説昔話

- | | | |
|---|---------------|----|
| 1 | 森下雨村と「樽」 | 8 |
| 2 | 乱歩と稚児の草紙 | 11 |
| 3 | 甲賀三郎と電話 | 14 |
| 4 | 大下宇陀児と青酸加里 | 17 |
| 5 | 海野十三と敗戦日記 | 20 |
| 6 | 浜尾四郎と春本 | 23 |
| 7 | 小栗虫太郎とピンチヒッター | 26 |
| 8 | 木々高太郎と人生二回結婚説 | 29 |
| 9 | 一杯亭主人の憂うつ | 32 |

権権先生夢物語 36

続権権先生夢物語 39

探偵小説闇黒時代 43

あとがき集

「本陣殺人事件」 47

「蝶々殺人事件」 49

「獄門島」 54

「悪魔が来りて笛を吹く」 56

真言秘密の自分の道楽 59

大阪の友人・藤沢桓夫君 60

まあちゃんのお婿さん 62

誤植奇談

64

屍体を匿す

66

エラリー・クイーン氏、雑誌の廃刊を三ヵ月おくらせること

70

余暇善用

73

山荘無精記

76

ノンキな話

79

初対面の乱歩さん

83

西田さんご兄弟のこと

86

好敵手甲賀・大下

89

不如丘と不木

92

啓蟄記

98

傷ましき母

102

本格探偵小説への転機

106

四半世紀ゆめうつつ

113

私の衆道趣味

116

墓とともに

119

金硫黄奇談

120

ご趣向本意

124

しかも私は飲む

126

一杯亭綺言

128

むささび悲歌

138

「国定忠治」の思い出

143

年寄りの冷や水 146

探偵作家の歎き 148

黒岩涙香を読む 150

山莊愚談 168

質作檜山節考 173

淋しさの極みに立ちて

182

鬼の大罪 187

お目出度き男 193

わが町・わが本 197

八つ当りの記 202

しずごころなく 206

「パノラマ島奇譚」と「陰獣」が出来る話 208

対談

金田一耕助VSコロンボ警部——石上三登志 238

歌手が来りて推理小説を語る——大橋国一 246

桜日記 257

桜日記に寄せて 295

年譜・目録——中島河太郎編

年譜 300

執筆作品目録 305

解説 中島河太郎 331

探偵小説昔話

1 森下雨村と「樽」

文士というものは、自分の住居に何々庵とか、何々亭とか命名するものらしい。私の兄貴分みたいな江戸川乱歩は、多少ハタリ性があったとみえ、幻影城と大きく出たが、いたって控えめな私は、人並みに十風庵と名のついていた。かつて捕物帳をかいていたところから、十手風をもじったのだが、ちかごろ考えるところあり、一杯亭と改名することにした。

私の恩師森下雨村は、土佐出身で酒豪であった。したがって奨め⁺じょうずでもあった。親分肌の雨村は、つねに周囲に

若いものを集め、ちつくと一杯と人に奨め、相手を盛りつぶしては悦^{しん}にいていた。私など、たびたび雨村に盛りつぶされているうちに、おいおい上達して、ついに出藍^{しゅつらん}の誉れを高くしたものである。

しかし、私が最近一杯亭と改名を決意したのは、ちつくと一杯の一杯亭ではなく、じつは私にはもう肺がひとつしかないのだそうである。それもなにかの機会に大手術をして、エイヤツとばかりに片っぱの肺をとってしまったというような威勢のいい話ではなく、ちつくと一杯やりすぎては咯血し、咯血しながらも意地きたなくちつくと一杯やり、治ったといっってはちつくと一杯やっているうちに、とうとう片っぱの肺がボシャッてしまったのだそうである。



ありし日の森下雨村氏

私はことし古希を迎えたが、片肺飛行でよくもここまで来つるものかな、とうたつた感慨にたえず、そこで一肺をもじって一杯亭と改名したしだいである。したがって以下五回にわたつて諸君が読まれるところのものは、片肺飛行の過去をふりかえつて昔を偲ぶ一杯亭綺言、古きよき時代のたわいなき物語と思つていただきたい。

森下雨村といつてもいまの人は知らないだろうが、この人こそいま全盛をきわめる推理小説の生みの親といつても過言ではあるまい。雨村を編集長とした「新青年」の創刊号は大正九年の新年号である。「新青年」といえば、昔を知る人でも、すぐ探偵雑誌を連想するらしいが、じつさいはその名のごとく青年雑誌。若者よ、大志を抱けとばかりに、海外発展を鼓吹しようという勇ましい雑誌であつた。しかし、それだけでは売物にならないので、アトラクションとして取上げられたのが探偵小説の翻訳であり、このアトラクションが「新青年」の名を高からしめたのである。乱歩は「探偵小説四十年」の中でこう書いている。

——同誌が後に呼びものとなつた翻訳もの増刊を初めて出したのは大正十年八月十日、その次が大正十一年二月十日、第三回が同年七月二十日、このころから愈々本物になつて来た。(中略)この一冊、世の探偵小説愛好家を狂喜せしめるに充分であつた。私はこの増刊を数日座右から放すことが出来ず、「盛んだなあ、盛んだなあ」とお題目のように呟きつづけたものである。(後略)——

乱歩の興奮目に見えるようである。

これに刺激されて乱歩が「二銭銅貨」をかき、ここにはじめて日本の探偵小説界に創作の機運が動きはじめ、多くのすぐれた探偵作家が「新青年」から誕生したのだから、森下雨村こそは日本の推理

小説の生みの親といっても過言ではなからう。義理堅い乱歩は、終世雨村に恩誼おんぎをかんじていたようである。松本清張はその雨村を、推理小説界における大正期の中央公論の滝田樗蔭である、といっている。

晩年の雨村は郷里の土佐に隠棲し、悠々として晴釣雨読の境地を楽しんでいたが、昭和四十年五月に不帰の客となった。ちつくと一杯やりすぎたのが原因である。遺著につりの随筆をあつめた「猿猴川に死す」があり、序文を松本清張、井伏鱒二、横溝正史が書いている。

雨村はまた自分自身名翻訳家であった。しかも土佐出身の豪傑肌であった雨村は、趣味も大人で、おなじ探偵小説でもロマン趣味のものよりも現実的なものを好んだ。そういう意味では、私は不肖の弟子である。

クロフツの「樽」を最初に本邦に紹介したのも雨村である。清張は「点と線」を書くとき、べつに「樽」を意識しなかったといっているが、読んでいたことはいたのであろう。そして「点と線」が今日の推理小説の全盛を招いたとすれば、「樽」をはじめで紹介した雨村の功績も見のがすことはできない。「樽」こそは交通機関の時刻表を巧妙に利用した犯人のアリバイを、克明にくずしていくアリバイくずし小説の元祖なのである。

現実派でもあった雨村は、現代の推理小説の傾向にたいして、地下で大いに意を強くしていることだろうが、それにしてもあまりにも多過ぎるアリバイくずしと、交通機関の時刻表の氾濫をみて、なんといつているだろうか。

「やっちよる、やっちよる」

と、快哉を叫んでいるだろうか、それとも、

「もうええ加減にしたらどうじゃ」

と、呆れているのではなからうか。

2 乱歩と稚児の草紙

ある期間、私は乱歩のことをせっていたいに乱歩さんと呼ばなかった。そのほうが発音しやすいのだが、あえて江戸川さんと呼んでいた。

乱歩と私は八つちがい、世話するほうでもされるほうでも、ちょうどよい年齢差であったと思う。若いころから乱歩は私を買いかぶっており、いつまでたってもボヤボヤしている私をしじゅう齒痒がった。いつになったらおまえはほんとうの力を出すのかと、酒ばかりくらっている私を叱り、昭和十三年ごろ某出版社から、甲賀三郎、大下宇陀児、木々高太郎の三人全集が出たときなど、それが私の病氣療養中なるにもかかわらず、ムキになって私を叱りつけた。あれでなかなかファイターだった乱歩は、ごひいきの私をそれらの三人の作家の競争者に仕立てたかったらし



(朝日新聞 昭和47/11/20)

い。そんなとき私は心の中で、そんなこというたかて無理や、あの三人とボクとでは才能もちがうし、教育のほどもちがいまっさかいいなと思いがら、はじめから諦めムードなのだから、乱歩が齒痒がったのもむりはない。

そういう調子だから私は乱歩のことを乱歩さんと呼んでいた。心理的にもあまえていたし、それに私は上方人だからことばづかいに女性的なところがあるらしい。

乱歩の旧友に井上勝喜という男があつた。ひところ乱歩のマネジャーみたいなことをやっていたが、乱歩が上方で関西探偵趣味の会を主宰していたところからの識合いなので私も親しかつた。その勝喜が私とふたりきりのとき、ニヤニヤしながらいったものである。

「あんたが乱歩さん、乱歩さんというラヴさん、ラヴさんときこえるなあ」

私はコンチキシヨウと思ひ、それ以来ぜつたいに乱歩さんと呼ばないことにした。

乱歩の衆道趣味はつとに有名である。

しかし、乱歩が講談社の雑誌にひろく大衆に愛好される探偵小説を書きはじめ、おいおいふところぐあい温かくなつてきたころ、私は大略血をやらかして上諏訪へ転地してしまつたので、じつさいに乱歩がその方面において、どういふふうに發展していったか多くをしらない。実行方面のことはともかくとして、凝り性の乱歩は衆道趣味の古い文献などいろいろ蒐集していたようである。

昭和十三年の秋、乱歩は上諏訪へ私を見舞つて二泊している。そのとき私はあらかじめ唐紙と筆墨を用意しておいて、否応なしに揮毫してもらつた。戦後の乱歩かしらない人にはまことに奇異の思ひを抱かせるであろうが、そのときの乱歩のはにかみようたらなかつたのである。それでも乱歩は約

束を守って、帰京後落款らくかんをつくり、持ってかえった一葉に押し送ってくれた。ところが右肩に押してある「岩躑躅」の印の意味が私にはわからなかった。東京へ引き揚げてからきいてみたが、乱歩はただあのほうの趣味のことばだよと答えたきりで、多くを語らなかったので、長いこと私にはその意味がわからなかった。ところが最近中島河太郎に教えられて、それが北村季吟の男色文献を集めた本の表題であること、また岩躑躅とは古今集にある、「思いいずるときわの山の岩躑躅、いわねばこそあれ恋しきものを」からとった、忍ぶ恋を意味するものであることをやっとしった。男色とは忍ぶ恋であるらしい。

いつのころだったか、有名な乱歩の土蔵のなかの書齋で「稚児の草紙」の模写を見せてもらったことがある。稚児の草紙というまでもなく京都三宝院所蔵の絵巻物で、鳥羽僧正の筆と伝えられる僧侶と稚児の性愛図である。ところが乱歩に見せてもらった模写を見ると、男の肝腎のものが、僧侶のそれはかいてあっても、稚児のものは全然描いてないのである。仰向けのまえばけになり、坊主に身をまかせている稚児の、陰毛はあっても肝腎のものがなく、下腹が大きくblankになっている。だから、それはまるで鼻をかき忘れた顔みたい、まことにまのぬけたものであった。稚児のそれがあってこそ稚児の草紙ではないか。私がふしぎに思ってたずねると、乱歩無然として曰く。

「これを模写したエカキにはその趣味がなく、そこをかくのをいやらしいと思ったんだね」

私は吹き出したくなるのを、それでは失礼と、やっと我慢したことである。

このあいだの読書週間の新聞を見てみると、少年物では乱歩のものが群をぬいて読まれているらしい。こよなく少年を愛した乱歩は、少年物を書くときでも力を抜かなかったせいだろう。

その乱歩も昭和四十年七月に逝った。森下雨村におくれること二ヵ月とちょっと、義理堅い乱歩のことだから、雨村を淋しがらせてはならぬと思っただのかもしれない。

(朝日新聞 47/11/27)

3 甲賀三郎と電話

戦後の探偵文壇しか知らない人は、江戸川乱歩のライバルは、大下宇陀児であり、木々高太郎であったと思っているかもしれないが、乱歩の最初のライバルは甲賀三郎だった。当時三郎は本格派、乱歩は変格派と呼ばれていた。これはずいぶんおかしい色分けだが、平林初之輔あたりが命名したのでろう。本格一本槍だった三郎は、またなみなみならぬ論客で、木々高太郎相手の論争は当時の探偵文壇をわかせたものである。

田中潤司の書いたものによると、三郎の「真珠塔の秘密」が

「新趣味」に発表されたのは、大正十二年八月号とあり、同年の「新青年」の四月号に乱歩の処女作「二銭銅貨」が発表されているから、そのデビューは乱歩より遅れること僅か四ヵ月ということになる。中島河太郎の『「新青年」所蔵作品目録』によると、その三郎が「カナリヤの秘密」で、「新青年」に初登場したのは同年の十一月号で、おなじ号に乱歩の第

